

# 明和病院なでしこ 敢闘賞

## 読売療育賞

### 脊髄損傷児の運動範囲 遊び通じて拡大

重症心身障害者施設で働く職員  
の優れた実践研究を表彰する  
「第15回読売療育賞」（読売光  
と愛の事業団主催）の敢闘賞に、  
明和町の「済生会明和病院なで  
しこ」が選ばれた。遊びを通じ  
て先天性脊髄損傷児の運動範囲  
を広げる研究などが評価され  
た。  
（赤塚堅）

研究成果の発表者は、作  
業療法士の村山萌さん（25）  
と保育士の田端亜弥さん  
（38）。いずれも、生後間も  
なく脊髄損傷と診断された  
4歳の男児を研究対象とし  
た。男児は出生直後から自  
発呼吸が認められず、首な  
どしか動かせない。なでし  
こには1歳になって入所し  
た。



楽器遊びなど遊びを通じて脊髄損傷児の  
運動範囲を広げる研究などに取り組んだ  
村山さん（右）と田端さん（明和町で）

研究対象となつた男児は、  
首や顔の動きがほとんどな  
く、頭や首の動きで楽器遊  
びや絵本読みをさせると、  
歌に合わせて楽器を鳴らす  
ようになり、大小の声かけ  
に応じて強弱を付けて太鼓  
をたたいた。「めくって」  
の声かけで絵本のページを  
めくり、使うペンを見つめ  
て選択したほか、ゲームに  
より視線の範囲が広がり、  
発声するようにもなったと  
いう。

村山さんは「首や視線の  
動きに応じた物事の変化を

どを取り付けた装具を装着  
し、頭や首の動きで楽器遊  
びや絵本読みをさせると、  
歌に合わせて楽器を鳴らす  
ようになり、大小の声かけ  
に応じて強弱を付けて太鼓  
をたたいた。「めくって」  
の声かけで絵本のページを  
めくり、使うペンを見つめ  
て選択したほか、ゲームに  
より視線の範囲が広がり、  
発声するようにもなったと  
いう。

になじめるよう、同じ職員  
が毎日30分、歌や楽器、絵  
本などを取り入れたプログ  
ラムを実践した。週1回、  
同世代の子とも接する機  
会を設けると、当初は大泣  
きしていたが、徐々に周  
りを見渡しながらかしめる  
ようになった。

理解し、主体的に遊ぶよう  
になった」と説明した。  
田端さんを含む保育士ら  
のチームは、入所当初、人  
見知りしていた男児が職員

## インフル茶でうがいを 鈴鹿市茶業組合 子ども向けに寄贈



緑茶の粉末を寄贈した大野組合長（右）  
と末松副市長（鈴鹿市役所で）

インフルエンザ対策とし  
て子どもたちに緑茶でうが  
いをしてもらおうと、鈴鹿  
市茶業組合は18日、市に緑  
茶の粉末を寄贈した。

ったが、男児の表情が徐々  
に豊かになり、成長するの  
な取り組みを考えてい  
る。男児が「さーい」と声  
をそろえた。

### 精義SS（柔員）

これまで支えてくれた方に感  
謝の気持ちを込め、最高の仲間  
たちと最高の舞台で、大好きな  
サッカーを思いっきり楽しませ  
ます。  
（青柳克幸監督）



### FCVINKS（上野）

全員攻撃全員守備！観て考  
えてプレーする！をモットー  
に、子供たちの目標である優勝、  
全国大会出場目指して頑張りま  
す。  
（宮本幸武監督）



### 東員SS（柔員）

チーム創設34年にして初のベ  
スト4。仲間の気持ちをボール  
に乗せ、心をつなぐサッカーで  
全国大会出場を目指し最後まで  
戦います。  
（荒木宣充監督）

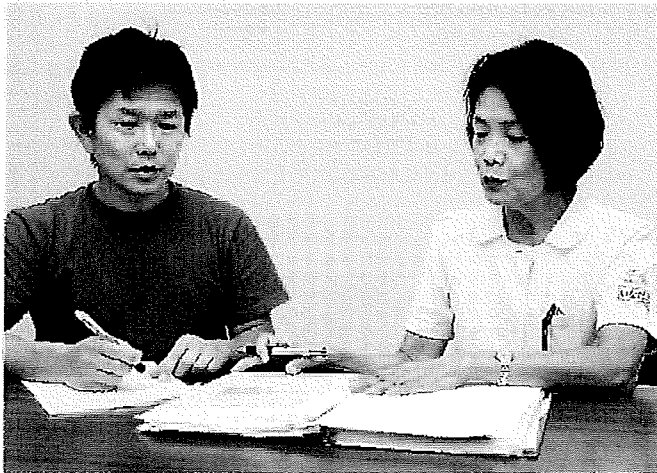


読売療育賞取賞 大阪発達総合療育センター

# 家族思いの終末期医療

重症心身障害者施設で働く職員の優れた実践研究に贈られる「第15回読売療育賞」(読売光と愛の事業団主催)の取賞賞に、大阪発達総合療育センター(大阪市東住吉区)が選ばれた。意思表示ができない施設利用者について、終末期の医療や介護に関する計画を作成したプロセスなどが評価された。携わった看護師らは「最期の瞬間までどう生きるかを家族と一緒に考えることができた」と話している。

## 計画作成過程を評価



家族の意思を尊重して作った計画書について振り返る稲田さん(右)と山口さん(大阪市東住吉区で)

受賞したのは、同センター(62)や介護福祉士・山口一の看護師・稲田律子さん(43)ら4人。同セン

ター内の生活介護事業所「なでしこ」を利用して、た意思表示のできない男性が、2018年に29歳で亡くなる前、母親から「楽しく過ごしたなでしこで容体が急変しても、救急車を呼ばずに看取してほしい」と要望されたことがきっかけだった。

男性は07年から週一回、通所して入浴などの生活支援を受けていたが、腎不全で危篤に陥り、通えなくなつた。その後、病状は思わしくなかつたものの、母親の希望で18年1月から利用を再開した。

母親から要望を受けたの

はこの頃。稲田さんと山口さんは「短時間利用が前提のなでしこで実現できるのか」と戸惑ったが、「家族の意思を尊重したい」と考えた。

そこで、なでしこ園長の医師ともう一人の女性看護師を加えた4人が中心となつて、患者や家族と一緒に今後の医療やケアの希望について考える「アドバンス・ケア・プランニング(ACP)」を実施することになった。

最初に男性の主治医から呼吸や心臓が止まった時の対応について教えてもらった。それを基に、事業所で容体が悪化した場合、救急搬送については家族の意向を尊重することなどを盛り込んだ計画を作成した。

その後、家族で計画について話し合ってもらい、合意を得た。母親からは「なでしこの計画が、家族と終末期の対応について考えるきっかけになった」と感謝

されたという。

男性は18年4月、家族に見守られて亡くなった。なでしこで看取ることにはなかつたが、稲田さんは「本人や家族にとっての最善を追求することが大切。施設利用者によりよい人生を送ってもらうにはどうすれば良いかこれからも考え続けた」と語った。

### あすのこよみ

6日(水)  
旧暦  
10月10日  
日出 6:22  
日入 17:01  
月出 14:05  
月入 0:10

大阪	豊中	枚方	能取
0	0	0	0
21	19	19	18
10	8	8	9
20	20	20	18
10	10	10	10
30	30	30	30
20	20	20	19
10	8	8	9
30	30	30	30

府内 北東の風日中北の風晴  
(あす)晴時々曇波0:5  
きのうの気温14

読売療育賞

# 患者の「心地よさ」分析

## 唐津の障害者施設 敢闘賞

重症心身障害者施設での優れた実践研究を表彰する「第15回読売療育賞」(読売光と愛の事業団主催)の敢闘賞に「からつ医療福祉センター」(唐津市双水)が選ばれた。視覚や温冷覚刺激などに対する患者の反応をチェックし、どの場合に心地よさを感じるかを分析した。成果を報告した作業療法士の桑原小牧さん(25)は「患者さんの特徴を細かく把握し、治療に役立てたい」と手応えを話している。

(鹿子木清照)



「研究成果を職員で共有し、患者さんのために生かしたい」と話す桑原さん

研究は、患者が五感を通<sup>と</sup>じてどんな刺激に心地よさを感じるかを調べる手法で行った。医師と桑原さん

ら3人の作業療法士がチームを組み、同センターに入所している20〜60歳代の11人を対象に実施。視覚、温冷覚のほかには振動覚、圧覚、触覚に一定の刺激を加え、検査前と後の心拍数と血液中に含まれる酸素の量(SpO<sub>2</sub>)を測定した。

検査結果には個人差やばらつきがあり、同じ傾向は確認できなかった。Sp

O<sub>2</sub>に関しては大きな変化は見られなかったが、クツションなどを使った圧覚検査では6人の心拍が安定し、おしぼりを使った温冷覚検査では5人の心拍が落ち着いていった。

桑原さんは「科学的な検査を通じて、圧覚や温冷覚刺激を受けることでリラックスする人がいることを確認できた」と言い、同センターはそれぞれの患者の「好きな感覚」と「苦手な感覚」を職員全体で把握し、より効果的な治療に結びつけていく。

共に研究した上司の鵜飼いずみさん(49)から「視野が広く、とても柔軟性がある」と評される桑原さん。「今回の研究で、患者さんの『感覚』に関する様々な反応を知ることができた。調査結果を活用し、喜んでもらえるような治療につなげたい」と抱負を語った。